Career Cruising

キャリア・クルージング

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。
人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探すため、
各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。

人のために歌う喜びを知り、仕事に対して初めて欲が出た

八神純子氏 Yagami Junko

シンガーソングライター

約10年間の活動休止期間を経て、2012年に日本での音楽活動を本格的に再開した八神純子氏。全国50カ所でコンサートを実施し、2013年には16年ぶりのオリジナルアルバムもリリース。その歌声はのびやかさを失わないばかりか、より表現力を増し、ブランクをみじんも感じさせない。「歌わない10年」から八神氏を復活させたものは何だったのだろう。

20歳でデビュー。歌うことがやりがいにつながらなかった

16歳で初めて作曲した『雨の日のひとりごと』がポプコン（ヤマハポピュラーソングコンテスト）優秀曲賞に入賞したのをきっかけに、20歳でデビュー。自作のデビュー曲『思い出は美しすぎて』は売り上げ12万枚のヒットとなったが、他人が作った曲を渋々歌った2枚目のシングルは売れなかった。

「私はアマチュア時代に楽曲のストックがなかったので、デビュー後は曲作りに追われ、余裕のない状態。『次の曲が売れなければ、地元の名古屋に戻るしかない』と引退も覚悟しました。そんなとき、表参道の歩道橋で不意に思い浮かんだ曲が『みずいろの雨』だったんです」

『みずいろの雨』は60万枚の大ヒットを記録。20代前半は『想い出のスクリーン』『Mr.ブルー』などヒット曲を次々と出したが、「いい時期ではなかった」と振り返る。

「ヒットが出て、『これで歌い続けられる』と最初はうれしかったんです。でも、次第に『売れる曲を作らなければ』という思いに苦しむようになりました」

曲が売れなければ自分を責め、売れても自分が本当に歌いたい曲とのギャップを感じて悩んだ。

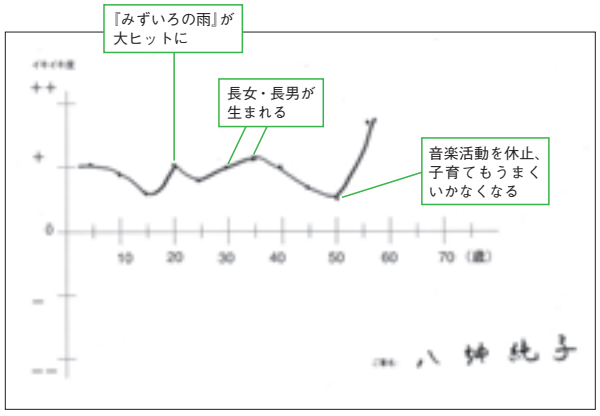
「『みずいろの雨』のように自然に曲を作りたいけれど、ヒットを狙うとどこか頭を使わなければならず、抵抗がありました。スタッフの方針にも疑問を感じましたが、周りは年上ばかりで、性格的にわがままは言えなかった。自分の人生を自分でリードしている感覚がなく、20代は歌うことがやりがいにつながりませんでした。まだ若く、自分の生き方が見えていなかったんですね」

米国同時多発テロを機に活動休止。自分らしさを失っていった

28歳でイギリス人音楽プロデューサーのジョン・スタンレー氏と結婚。米国に移住したのは、日本での音楽

Career History　八神純子氏のキャリアヒストリー

1958年	0歳	名古屋市生まれ。会社経営者の長女として生まれる。3歳からピアノ、6歳から日本舞踊を習う
1974年	16歳	愛知淑徳高等学校在学中に初めて作詞作曲した『雨の日のひとりごと』が第8回ヤマハポピュラーソングコンテスト優秀曲賞に入賞
1978年	20歳	『思い出は美しすぎて』でデビュー。同年、3枚目のシングル『みずいろの雨』が売り上げ60万枚を記録。以後、ヒット曲を次々と出す
1986年	28歳	イギリス人の音楽プロデューサーと結婚し、翌年に米国・ロサンゼルスに移住
1989年	31歳	長女出産。4年後に長男を出産。育児のかたわら、毎年帰国して音楽活動を行っていたが、2001年の米国同時多発テロを機に音楽活動を休止
2010年	52歳	久しぶりに日本の音楽番組で歌い、好評を得る
2011年	53歳	東日本大震災後、被災地での支援活動を始める。同年、10年ぶりの日本公演を開催
2012年	54歳	カバーアルバム『VREATH』を発売し、日本での活動を本格的に再開。25年ぶりとなるコンサートツアーを全国50カ所で行う
2013年	55歳	16年ぶりのオリジナルアルバム『Here I am』を発売。東北での支援活動も継続している



直筆の人生グラフ。ヒット曲を次々と出した20代前半は下降期。50代で被災地支援を通して人のために歌うことを知ってからは上昇を続ける。

Interview = 泉 彩子、大久保幸夫　Text = 泉 彩子（48〜50P）、大久保幸夫（51P）
Photo = 佐久間ナオヒト

生活に区切りをつけたいという気持ちもあった。

「今思えば錯覚だったのですが、『日本ではやるだけのことをやった』という思いがありました」

31歳で長女、35歳で長男を出産。子育てが生活の中心になったが、「歌いたい」という思いは消えず、毎年帰国をしてコンサートを開催していた。ところが、2001年の米国同時多発テロで日本でのコンサートを中止したことをきっかけに、音楽活動と距離を置くようになる。米国に住む八神氏にとって、テロのショックは大きく、幼かった子どもたちのそばにいることを優先したのだ。

「日本で自分にできることはあまりないと感じていたことも大きかったと思います。1995年の阪神・淡路大震災のとき、とにかく何かをしたいと思ったのですが、ある人に『歌なんて助けにならないよ』と言われて、妙に納得してしまったんですね。外野の声は気にせず、歌いに行くのが本来の私なのに……。そこへさらに9・11で守りに入るようになり、自分らしさをどんどん失っていきました」

楽しかったはずの子育ても、子どもたちが成長するにつれてうまくいかなくなった。

「米国の子どもは自立が早いこともあって、母親の意識が100%自分に向かっていることが窮屈だったのでしょうね。とくに娘とは激しくぶつかりました。そんなときに友人から『純子の喜びは何？』と聞かれたんです。『子どもの成長』と答えたら、『それは間違っている』と言われ、目が覚めました。人にはそれぞれの人生があり、誰かに左右される喜びではいけない。私が自分だけのものを持つことが、子どものためにもなると考えて、長男が18歳になったら仕事に戻ろうと決めたんです」

東日本大震災後、本格復帰。歌で人の力になりたいと思った

ちょうどその頃、NHKの音楽番組『SONGS』に出演し、視聴者から好評を得たことも背中を押した。復帰に向けてボイストレーニングとウエイトトレーニングを徹底的に行い、久しぶりのコンサートのために飛行機に乗ろうとしたまさにその日、東日本大震災が起きた。

「コンサートは半年後に延期になりましたが、あるファンの方が『八神さんはアーティストなんだから、何かしてください』と言ってくださったんですね。そのひと言に励まされ、阪神・淡路大震災のときのような後悔はしたくないと被災地に向かいました。歌いに行くというのではなく、『できることをしよう』という気持ちでした」

被災地の支援を行う「トランスパシフィックキャンペーン」を立ち上げ、現在までに東北100カ所以上を訪問。「炊き出しライブ」などの活動をしてきた。一方、自身の音楽活動も本格化し、メディアにも出るようになったが、復帰当初は現在の状況を想像していなかったという。

「年に数回コンサートができればいいなというくらい。コンサートツアーやオリジナルアルバムの発売ができるなんて思っていませんでした。でも、東北で活動するうちに、私にアーティストとしての力がもっとあれば、被災地のために伝えられることやできることが増えるのにと感じて……。東北を応援していくためには、私自身の音楽活動を頑張らなければと思ったんです」

依頼された仕事はできる限り受け、生まれて初めて自分で営業してラジオの仕事も取った。

「歌うことで人の力になりたいと思ったとき、仕事に対して初めて欲が出ました。人とどんどんつながり、仕事も東北での活動も広がって、復帰前にあった心の穴が知らないうちに埋まっていた。人間って人のために何かをしたほうが、自分のことをやるよりも力が出るんですね」

何のために歌うのか。その答えが明確にある今は、どんな仕事も楽しいという。

「昔なら『私のやることじゃない』と突っぱねていたことも、やると自分で決めて、やりながらその仕事の形を自分流にしていけばいい。何でもこいという心境です」

最近では実家の医療機器会社の取締役にも就任した。

「畑違いの仕事ですが、『八神じゃないとダメだ』と思わせる仕事をすることが大事という点では経営も歌も同じだと感じます」と微笑む八神氏。さらなる経験を重ね、今後もより熟成された音楽を届けてくれるだろう。

After
Interview

中年期の危機を乗り越え
最も充実した時を迎える

大久保幸夫　リクルートワークス研究所　所長

八神氏は1997年、39歳の時に『探しものは心の中に――アメリカ子育て日記』という本を出版している。そのなかで、夫であるスタンレー氏がミッド・ライフ・クライシス（中年期の危機）を経験して、仕事に打ち込めず、周囲が心配するほどに落ち込んでいた時期があることに触れている。「もしかしたら、同じことが私の身にも起こるのではないか」と心配しているのだが、その心配は、後に現実となったようだ。

中年期の危機とは、精神分析医のエリオット・ジャックスが1965年に論文で使った言葉であり、中年期には誰もが自分自身の能力の限界やいずれ訪れる死と向き合わなければならないとしている。また臨床心理学の権威であるハリー・レビンソンは「しばしば怒りっぽくなり、不満が多くなり、また気分が落ち込み、心身症状が表れる。そして何かを成し遂げようとする意欲も減退する」と分析している。

八神氏の場合は、阪神・淡路大震災や9・11テロを受けて、自分にできることの限界を感じ、家族を守ることを理由にして狭い世界に閉じこもってしまった。「歌わない10年」は、まさしく中年期の危機そのものだったのだ。

しかし、危機は去り、みごとな復活を遂げて、今はこれまでにないほど充実した時を迎えているという。

若い頃にヒット曲を生み出した実績とネームバリューがある。当時からのファンは今も健在で、さらに大きな力で彼女の活動を支援してくれる。歌唱力については、高音の歌声は維持され、低音の表現力が加わっている。「誰かのために」という歌う目的も明確になった。「自分らしいことをやる」のではなく「やることを自分らしく変えていく」という発想の転換で、活躍の幅も広がった。

八神氏のライフ・ストーリーは私にいくつものことを気づかせてくれた。1つはシニア期の可能性について。1つは若い時に全力で仕事をすることの必要性について。そしてもう1つは自分のためではなく誰かのために仕事をするという利他性の重要性についてだ。

インタビュー後、高揚した気分のまま、八神氏のディナーショーにも行った。「若い頃は、ライブは緊張するから嫌いだった」（八神氏）という人とは思えない、とても楽しいライブだった。

年を重ねるのも悪くない――最後はそんな感想に辿り着いた。

中年期の危機